

Q3-2. 帝王切開での分娩を予定しています。手術時の血栓症を予防する方法を教えてください。

血栓症とは、血管内に「血栓」と呼ばれる血の固まりができるものです。足の静脈血管内にできることが多く、一度できてしまった血栓が血管からはがれると、血液の流れに乗って心臓へ流れ、肺の動脈に詰まってしまいます。これを肺塞栓症といいます。大きな血栓が肺の動脈に詰まってしまうと心臓が停止してしまったり、呼吸ができなくなったりして命を落とすこともある疾患です。これらを合わせて静脈血栓塞栓症と呼びます。

血栓ができる原因はいろいろありますが、血液の循環が悪い状態が長時間続いた場合に起こりやすくなります。血栓症で有名なものにエコノミークラス症候群があります。これは飛行機での長時間のフライトによりずっと同じ姿勢でいることで下肢の血液循環が悪くなり主に下肢静脈に血栓ができ、静脈血栓塞栓症を起こすものです。どんな手術でも少なからず同じ姿勢でいる時間があるため、すべての手術において静脈血栓塞栓症を起こす可能性があります。

もともと妊娠中は非妊時に比べ血液が固まろうとする力が強くなっていて、血栓ができやすい状態にあります。抗リン脂質抗体症候群など血栓ができやすい疾患をもっている場合や、多胎妊娠、妊娠高血圧症候群、高齢、肥満、過去に静脈血栓塞栓症を起こした方などはリスクが高くなります。

帝王切開術では通常分娩に比べるとベッド上で安静にする時間が長く、口から水分や食事が取れないため、血液が濃縮し血栓症が起こりやすくなります。

血栓症の一番の予防は血栓を作らないことです。術中や術後に弾性ストッキングを着用したり下腿にマッサージポンプを使用したりすることにより、ベッド上での安静が必要なときも血液の循環をよくします。経過が順調であれば早い場合では術後6時間頃から、遅くとも翌日には歩行を開始し、下肢を動かすことにより、血栓症を予防します。歩行を開始した後も、ベッド上にいるときは積極的に足の運動や寝返りをし、長時間同じ姿勢でいることを避けましょう。抗凝固薬（血液が過度に固まらないようにする薬）の注射を行うこともあります。上記のような血栓ができるリスクの高い妊婦さんでは、術後に未分画ヘパリンや低分子量ヘパリン、選択的 Xa 因子阻害薬といった抗凝固薬を使用することもあります。

(竹田 省)